



左隻部分(緑裂の唐織)



左隻



〈参考〉右隻

1 源氏物語図屏風(若紫) 伝狩野永徳 六曲一双のうち左隻

紙本金地着色 桃山(江戸初期(十六〜十七世紀))
本紙一七三・〇×三六〇・八

本屏風は、桂離宮を別荘とした旧桂宮家に伝来した屏風である。旧桂宮家は、天正十八年(一五九〇)に創立された八条宮家に始まる。初代智仁親王(一五七九〜一六二九)が、一時、豊臣秀吉の猶子であったこともあってか、同家には、狩野永徳(一五四三〜九〇)筆と伝承される屏風が、本屏風のほか、「草花図屏風」(展示No.2)など数点が伝わり、また、現在、東京国立博物館に所蔵される国宝「楡図屏風」も、同宮家伝来の作品である。これらはいずれも、もとは八条宮家邸宅の襖絵であり、その華やかさを彷彿させる。

本屏風の画面は、「源氏物語」の「若紫」を主題としている。画面向かって左上から中央にかけて、北山の庵に住まい、無邪気に遊ぶ幼い若紫が、雀を逃がしてしまい、縁に追って出てきた様子を、桜樹の下、垣根越しにうかがう源氏の姿を描く。画面右側には柳と牛車が描かれるが、これは、右隻左画面「蜻蛉」へと連続し、その右側には「常夏」の場面などが展開していく。また本屏風とは別に、「一連の「源氏物語」の場面の一部が、二曲一隻の屏風として遺されており、これらから、八条宮家邸宅に、源氏の間の一室が設けられていたのではないかと考えられる。

本図は、永徳筆と伝えられるが、永徳自身というよりは、その一門の画師によるものと考えられる。この「若紫」の図様は、永徳以前にすでに土佐派によって描かれていたもので、土佐派を確立した土佐光信によるハヴワード本画帖や、土佐光吉の京博本画帖にも見られる。障屏画の需要が多かった永徳の時代には、むしろ土佐派が得意としていた小画面の源氏物語図の図様を大画面へと展開し、狩野派の個性を活かした画面に仕上げていたと言えよう。

さらに本屏風画面の周囲の緑裂には、慶長期頃のものと考えられる桐文様の美しい唐織が廻らされている。これは、もともと襖絵だった本図が、慶長十年(一六〇五)の内裏拡張に伴う移転、あるいは同十四年の新書院建築といった理由で屏風に変更され、またゆかりの人物の装束(年代的には宮家初代親王妃の桂か)を緑裂としてあしらったことを示唆しているのではないかと考えている。それにしても、華やかな画面と美しい唐織が見事に調和した作品である。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出版を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

江戸の美意識 — 絵画意匠の伝統と展開

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 28

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 株式会社 東京美術

翻訳 横溝廣子

発行 宮内庁

平成十四年三月二十六日発行

©2002. Museum of the Imperial Collections